

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02842

研究課題名（和文）日本語学習者の学習ツール使用状況の解明と教師の教育支援リテラシーを結ぶ総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive research linking the clarification of the usage of learning tools by Japanese language learners and teachers' education support literacy

研究代表者

鈴木 智美（SUZUKI, Tomomi）

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授

研究者番号：70332632

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、高度なICT（情報通信技術）化の中、世界の日本語学習者がどのような学習ツールを使っているかをオンラインアンケート調査により明らかにし、その結果を教師の教育設計リテラシーの向上に結びつけていくことを目的とする。国内外の大学（東京外国語大学と海外6つの国・地域の大学）全609名の学習者から回答を得、アプリやウェブサイトなど多様なツールが活発に使用されている現状が明らかになった。学習者に人気の辞書アプリの利点と注意点の検討も行った。これらのツール使用の現状をふまえ、教師は意義ある教室活動を再設計し、学習者の「自己学習設計」を支援していくことが今後の教育設計において重要になるとの結論を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アニメや漫画などポップカルチャーの人気とともに、世界の日本語学習者の学習動機や学習目的は多様化している。高度に情報化が進む現代社会では、学習者の使用する学習ツールや学習スタイルにも大きな変化が生じている。学習者の学習ツール使用の実態を把握し、今後の日本語教育における教育設計、教育支援のあり方を提案していくことは、日本語教育分野において、社会的変化に対応した教授法・教材開発等を考えるためにも必要不可欠である。グローバル化・多文化化が進む現代社会では、日本語学習は社会全体に関わる課題でもあり、また新しい世代の学習者の学習スタイルを知ることは、教育一般に向けても新しい視点をもたらすものとなる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to investigate the usage of learning tools by Japanese language learners in today's highly developed ICT environment and to improve teachers' instructional design literacy based upon the result of that investigation. An online survey of international students at TUFS (Tokyo University of Foreign Studies) was conducted and of learners in overseas universities from six countries/regions (the UK, the Netherlands, Serbia, Thailand, Hong Kong and Egypt), with a total of 609 respondents. The investigation reveals that learners actively use various types of apps and websites. Popular dictionary apps are also critically evaluated concerning their contents and usability. Japanese language teachers are expected to design worthy classroom activities, considering learners' usage of these tools. Teachers are also required to improve their ability to support students' personal (self)-learning design. These conclusions show a key to the future education design.

研究分野：日本語学・日本語教育

キーワード：学習ツールの多様化と使用の活発化 アプリとウェブサイト 定番化するツールと個別のお気に入りツール 教師の教育設計リテラシー向上の必要性 学習者の自律学習リテラシー向上の必要性 自己学習設計の時代 教室活動の再価値付け 辞書アプリの質向上の継続的必要性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

日本語学習者を取りまく環境は、ICT（情報通信技術）の発展に伴い、殊に2000年代に入ってから加速度的に進化してきた。現在、大学レベルで日本語を学ぶ学習者たちの多くは1990～2000年代以降に生まれたいわゆる「デジタルネイティブ」（digital native）世代であり、既に初等・中等教育の段階からコンピュータおよびインターネット等にごく当たり前に触れてきた世代である。多様化・スピード化・デジタル化が急速に進む現在、日本語学習者はどのような学習ツールを使用しているのか、その実態について調査を行い、その結果を現場の日本語教師たちと共有し、ICT時代における教師の教育支援リテラシーの向上に結びつけていくことが求められる。

2. 研究の目的

本研究は、主として大学レベルで日本語を学ぶ学習者が、日本語を勉強する時、ふだんどのような学習ツールをどのように使用しているのか（辞書、スマートフォンのアプリケーション（以下、アプリ）、各種ウェブサイト、SNSなどの活動等を含む）、その最新の使用実態をオンラインアンケート調査によって明らかにし、その結果からICT時代の学習者の学びの姿をとらえ直し、日本語教師の教育支援リテラシーの向上へと結びつけていくことを目的とする。

3. 研究の方法

国内における大学レベルの留学生、および海外の大学で日本語を学ぶ学習者を対象にアンケート調査を行い、現在、世界の日本語学習者が、日本語を学ぶ際にどのようなアプリやウェブサイトなどの学習ツールを使っているのかを明らかにした。調査協力を得たのは、東京外国語大学留学生日本語教育センター国費学部留学生予備教育コース在籍生、東京外国語大学「全学日本語プログラム」（交換留学生、研究生など多様な留学生を対象とした全学的な日本語プログラム）受講生、および海外6つの国・地域の大学で日本語を学ぶ学習者である。

東京外国語大学においては、2016年度に調査を一部実施済みであり、その結果も加えて分析を行った（鈴木他2018a, 2019b, 2020）。学習段階に応じた学習ツール使用の変化をとらえるために、インタビュー調査も一部実施した（中村他2020）。これらの調査の結果については、研究会やワークショップ等を通じて日本語教育に携わる主として教師たち、および学習者たちとも共有を図り、高速かつ高度なICT化の進む現代において、日本語教師はどのような点に留意してその教育設計能力を高めていけばよいか、また学習者は自身の学習にどのようにツールを活用していくことができるか、考察を行った（渋谷他2018, 鈴木2018, 鈴木他2018b, 2019aほか）。

(1) オンラインアンケート調査の概要

ツール使用状況調査は、無記名式のオンラインアンケート方式で行った。オンラインアンケートは、東京外国語大学留学生日本語教育センターおよび総合情報コラボレーションセンターの共同開発による日本語学習のためのeラーニング教材サイト「JPLANG」を通じて行われた。協力者（協力校）、調査時期および回答者人数は以下の表1、表2の通りである。調査協力を依頼した海外の大学は、東京外国語大学の国際学術交流・学生交流等の協定校の中から、地域的なバランスを考え、先方大学関係者への協力依頼と日程調整、本研究グループからの調査者派遣等を調整した上で選定した。国内・海外を合わせ、回答者総数は609名である。

表1 オンラインアンケート調査協力者の概要（国内留学生）

実施時期	協力者	回答者人数
2016年12月*	東京外国語大学 留学生日本語教育センター国費学部留学生 予備教育プログラム在籍生	34名
2016年12月*	東京外国語大学 「全学日本語プログラム」履修生	105名
2017年6月～7月	東京外国語大学 「全学日本語プログラム」履修生	34名
2017年7月	東京外国語大学 留学生日本語教育センター国費学部留学生 予備教育プログラム在籍生	49名
（*は2016年度に実施済みの分）		計 222名

表2 オンラインアンケート調査協力者の概要（海外学習者）

実施時期	協力校	国・地域	回答者人数
2017年11月	リーズ大学	英国	23名
2017年11月	ベオグラード大学	セルビア	132名
2018年2月	タマサート大学	タイ	92名
2018年3月	ライデン大学	オランダ	35名
2018年5月	香港大学	中国（香港）	80名
2018年6月	カイロ大学	エジプト	25名
			計 387名

(2) 調査内容

オンラインアンケートは下記の図1のような構造となっている。調査対象の学習ツールは、電子辞書（いわゆる辞書専用機のこと。例えばカシオ（CASIO）社製造・販売のものなど）、スマートフォン等のアプリ、各種ウェブサイトである。動画視聴やSNS利用なども広い意味で学習ツールを用いた活動と考え、調査の対象に含めた。アプリやウェブサイトについてはよく使う具体的なツール名をそれぞれ最大3つまで挙げてもらい、その使用頻度、使用目的、利便性等についての評価を問うている。

【説明文】
I. 学習ツールについての質問
A. 電子辞書について 持っているか・使うかどうか（→使わない人は質問Bへ） 【電子辞書について】質問
B. スマートフォンやコンピュータのアプリケーションについて（最大3つまで回答） 使うかどうか（→使わない人は質問Cへ） 【アプリについて】質問その1 まだほかにある人はその2へ、ほかにない人はCへ 【アプリについて】質問その2（1と同じ） まだほかにある人はその3へ、ほかにない人はCへ 【アプリについて】質問その3（1と同じ）
C. ウェブサイトについて（最大3つまで回答） 使うかどうか（→使わない人は質問Dへ） 【ウェブサイトについて】質問その1 まだほかにある人はその2へ、ほかにない人はDへ 【ウェブサイトについて】質問その2（1と同じ） まだほかにある人はその3へ、ほかにない人はDへ 【ウェブサイトについて】質問その3（1と同じ）
D. その他の活動について
II. 回答者自身についての質問 日本語レベル、母語、日本語学習の動機など

図1 オンラインアンケートの全体構造

アンケート調査における主な質問項目は以下の表3の通りである。実際は各質問項目には英訳が並記されている。質問項目数は、A（電子辞書）について8項目、B（アプリ）について8項目、C（ウェブサイト）について7項目、D（その他の活動）2項目、計25項目である。該当する回答がない場合（そのツールを使用していない場合など）は、適宜次の質問に進む形式となっている。多くは多肢選択式の質問だが、一部補足的に記述回答を求める質問が含まれる。

表3 学習ツールアンケート：質問項目一覧（日本語のみ抜粋）

A. 電子辞書について	
1	自分の電子辞書を持っていますか。
2	どこの（何社製の）電子辞書ですか。
3	どうやってその電子辞書を選びましたか。
4	日本語を勉強する時、電子辞書を使いますか。
5	電子辞書の中の辞書では、どの辞書をよく使いますか。（英和・和英辞典など）
6	電子辞書を使って、どんなことをしますか。
7	あなたが使っている電子辞書について、良い点を教えてください。
8	あなたが使っている電子辞書について、不便な点があったら教えてください。
B. スマートフォンやコンピュータのアプリケーション（あるいはプログラム）について	
	日本語を勉強する時、スマートフォンやコンピュータのアプリケーションを使いますか。【使う場合、以下の質問に回答。アプリの名前は1~3つまで順に挙げるができる】
1	あなたがよく使うアプリケーションの名前を書いてください。
2	そのアプリケーションをダウンロードできるサイトがあったら、そのURL（http(s)で始まるアドレス）を、以下にコピー&ペーストしてください。
3	そのアプリケーションを、どの機器でよく使っていますか。（スマートフォン、タブレットなど）
4	そのアプリケーションを、どのぐらいよく使っていますか。
5	そのアプリケーションを使って、どんなことをしますか。
6	そのアプリケーションについて、良い点を教えてください。

7	そのアプリケーションについて、不便な点を教えてください。
C. ウェブサイトについて	
	日本語を勉強する時、ウェブサイトを使いますか。【使う場合、以下の質問に回答。ウェブサイトの名前は1〜3つまで順に挙げるができる】
1	あなたがよく使うウェブサイトの名前を書いてください。
2	そのウェブサイトの URL (http(s)で始まるアドレス) を、以下にコピー&ペーストしてください。
3	そのウェブサイトを、どのぐらいよく使っていますか。
4	そのウェブサイトを使って、どんなことをしますか。
5	そのウェブサイトについて、良い点を教えてください。
6	そのウェブサイトについて、不便な点を教えてください。
D. その他の活動について	
1	日本語を使って、ふだん、どのようなことをしていますか。(新聞や雑誌を読む、まんがを読んだりアニメを見たりする、日本人の友だちや知り合いと日本語で話すなど)
2	学校の勉強以外で、ほかに日本語を使ってしている活動があったら、教えてください。

4. 研究成果

(1) 調査結果

回答者全 609 名の国籍は、調査を行ったセルビア、タイ、中国（香港）、オランダ、エジプト、英国のほかに、中国、ブラジル、韓国、モンゴル、イタリア、インドネシア、ロシア、インド、オーストラリア、ブルガリア、マレーシア、アメリカ合衆国、シンガポール他、全 70 の国・地域にわたる。母語は計 48 言語となった。男女別では、男性 188 名、女性 402 名、回答なし 19 名である。年齢は 18～22 歳が 7 割以上を占めている。日本語のレベルは、初級から中級レベルを中心に、上級レベルまでが含まれる。なお、調査を行った海外の各大学において、学年進行と日本語レベルは大まかには一致しており、学年が上がるにつれて日本語レベルも高くなるが、既習者や留学経験者などの場合は必ずしもそうではない。日本語能力試験については約 45%が受験済みであるとし、合格レベルは N5 から N1 までにわたる。

以下に、調査結果の中から、アプリおよびウェブサイトの使用頻度、および電子辞書の所有の有無についての回答結果をグラフで示す。

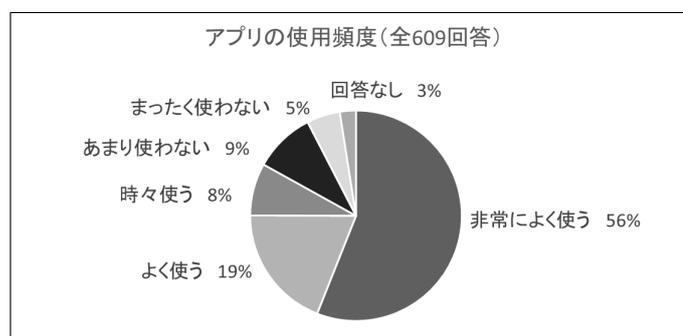


図2 アプリの使用頻度

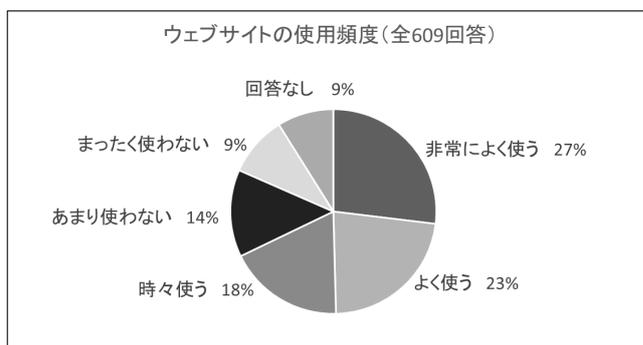


図3 ウェブサイトの使用頻度

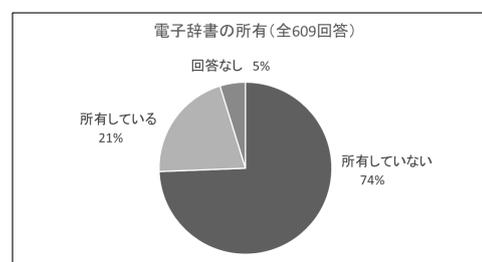


図4 電子辞書所有の有無

スマートフォン等のアプリの使用状況は「非常によく使う」との回答が56%と半数以上を占め、「よく使う」19%と合わせると回答者の75%がこれをよく使っている。一方、ウェブサイトの使用は「非常によく使う」から「あまり使わない」まで比較的ばらつきが見られる。スマートフォンアプリが、いつでもどこでも利用可能なツールとして、その使用の拡大と定着とを顕著に見せていることがわかる。電子辞書については、「所有している」との回答127に対して、「所有していない」との回答が453と7割以上を占めた。日本語学習者の中で電子辞書のユーザーはやはり減少傾向にあることが見てとれる。

よく使うツールとして、回答者からは計124種のアプリ（延べ742回答）、および計98種のウェブサイト（延べ667回答）の名前が挙げられた。よく使われるアプリの役割は「辞書」「翻訳」「学習」という3つの機能に大別できる。学習機能を持つアプリには、漢字の検索・学習に特化したアプリのほか、フラッシュカード形式あるいはクイズ形式の学習アプリが挙げられている。スマートフォンのカメラ機能を用いて、対象テキストの翻訳や漢字の読み方等を表示することのできるアプリなど、ICT時代ならではの特色を持つものも挙げられた。ウェブサイトについては「辞書」「翻訳」のほか、総合的なeラーニングサイト、動画共有サイト、一般的なウェブ検索サイト、百科事典サイト、日本語によるニュース等の視聴サイト、語の共起関係を検索できるサイト、日本語のアクセントやイントネーションを確認できるサイトなど、特色を持つサイトが上位に挙げられた。

学習者に人気のある辞書アプリ4種については、言語学的・言語教育学的観点から、実際にこれらのアプリの語句検索方法・検索結果、収録の訳語や例文等について検討を行った。その結果、言語学習を意図した修正・加工などが特に施されていない、膨大な量の例文が無作為に表示される点や、文脈等の情報がないまま、似た意味を持つ複数の対訳候補が提示されるのみであることなど、学習者にとっては、そのアクセス可能な情報の量と質において、注意が必要な点があることがわかった（鈴木他2020）。

(2) 考察および今後の展望

ICT時代の多くの日本語学習者が、その日本語レベルに関わらずアプリやウェブサイトなど各種ツールを豊富に取り入れ、学習に役立てている現状が確認できた。使用ツールの種類は多岐にわたり、多くの学習者から支持される、いわば「定番」とも言える人気のアプリやウェブサイトがある一方、1名のみが名前を挙げている、いわば個々の学習者の「お気に入り」と見られるツールがあると考えられることもわかった。インタビュー調査からは、上手なツールユーザーは、自身の学習をモニターし、進むべき目標に照らして今の自分に必要なことは何かを考えながら、役立つツールを的確に取捨選択して使用していると考えられることもわかった。この場合、「ツール」には、インターネットスクールの受講や短期留学を選ぶなど、学習方法・学習形態を自律的に選択していくことも広く含まれる。

学習者にとって学習ツールは、今日の前にある未知の言葉の意味を調べたり、文章を翻訳したりなど、さしあたっての課題を解決するためだけに必要なものという狭い意味のものではなく、長期的に見れば、学習者の学習の継続や、次の段階に進んでいくための動機付けを支える役割を果たすものとして位置付けられる。学習者が、各種ツールの特徴を把握し、その選択と活用を的確に行うことを含めて、自身の学習を自身で設計・管理するという「自己学習設計」の力をつけていくことが、今後の日本語教育を考える上で、重要な鍵となるだろう。

教師には、このような学習者の学習ツール活用の現状を把握した上で、ICTの高度かつ高速な発展の時代において、「教室」で学習することの再価値付けを行っていくことも求められる。インターネットの利点を生かせば、いわばあらゆる学習がオンラインで行うことも可能であると言える状況の中で、学校の「教室」に集まり、そこで学ぶということにどのような意義付けを行うことができるか。教師は、教室でこそ行う意味のある学習活動をデザインし、それを学習者の学びの全体の中に位置付けていくことが必要になるだろう。

今後、学習者が各種ツールの活用を含めた「自己学習設計」の力を身につけ、様々な形態を組み合わせ学習を進めていく力をつけていけば、教師にはそのような学習を的確にサポートする役割を果たすことも求められる。これまで以上に教育の全体を見渡し、それをデザインする力が必要となる。ICT時代という新たな時代の中で、学習ツールの変化と多様性に着目し、それを切り口として見ていくことで、今後、日本語教育そのものも、その姿を活発かつ柔軟に変容していく可能性を持ったものとして、とらえ直されていくことになると考えられる。

引用文献

- 渋谷博子・清水由貴子・鈴木智美（2018）「デジタル時代の教師の学習支援のあり方」日本語教育振興協会主催：平成30年度日本語学校教育研究会 分科会V 於国立オリンピック記念青少年総合センター
- 鈴木智美（2018）「日本語学習者はどのような学習ツールを使っているのか—留学生を対象にしたアンケート調査の結果から見えるもの—」国際シンポジウム『コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて—学習者調査から新しい辞書の構想と開発へ—』於国際交流基金日本語国際センターホール
- 鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰・藤村知子（2018a）「予備教育課程の国費学部留学生の学習ツール使用状況—2016～2017年度実施のアンケート調査の結果から見えるスマートフォンアプリの使用目的の多様化と学習スタイルの変化—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第44号 pp. 195-217
- 鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰（2018b）「世界の日本語学習者は今どのような学習ツールを使っているか—ICT時代の日本語教育の鍵をツール使用状況から考える—」第12回 国際日本語教育・日本研究シンポジウム 於香港理工大学
- 鈴木智美・中村彰・清水由貴子・渋谷博子（2019a）「ICT時代の日本語学習者はどのような学習ツールを使っているか—日本語教師を対象としたワークショップ実施報告—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第45号 pp. 239-255
- 鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰・藤村知子（2019b）「東京外国語大学全学日本語プログラムで学ぶ留学生の学習ツール使用状況—2016～2017年度実施のアンケート調査の結果と分析—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第45号 pp. 221-238
- 鈴木智美・清水由貴子・中村彰・渋谷博子（2020）「海外の大学における日本語学習者のツール使用状況の解明—ICT時代における教師の教育設計リテラシーの向上を目指して—」東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学』第10号 pp. 23-48
- 中村彰・鈴木智美・渋谷博子（2020）「日本語学習者の学習ツール使用の変遷をその学習歴から探る—初級から超級までの6名の留学生へのインタビュー調査に基づいて—」『東京外国語大学国際日本学』プレ創刊号 pp. 186-196

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰・藤村知子	4. 巻 第45号
2. 論文標題 東京外国語大学全学日本語プログラムで学ぶ留学生の学習ツール使用状況：2016～2017年度実施のアンケート調査の結果と分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集	6. 最初と最後の頁 221-238
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木智美・中村彰・清水由貴子・渋谷博子	4. 巻 第45号
2. 論文標題 ICT時代の日本語学習者はどのような学習ツールを使っているか：日本語教師を対象としたワークショップ実施報告	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集	6. 最初と最後の頁 239-255
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰・藤村知子	4. 巻 第44号
2. 論文標題 予備教育課程の国費学部留学生の学習ツール使用状況 2016～2017年度実施のアンケート調査の結果から見えるスマートフォンアプリの使用目的の多様化と学習スタイルの変化	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集	6. 最初と最後の頁 196 - 217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木智美・清水由貴子・中村彰・渋谷博子	4. 巻 10
2. 論文標題 海外の大学における日本語学習者のツール使用状況の解明 ICT時代における教師の教育設計リテラシーの向上を目指して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』	6. 最初と最後の頁 23-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中村彰・鈴木智美・渋谷博子	4. 巻 0
2. 論文標題 日本語学習者の学習ツール使用の変遷をその学習歴から探る 初級から超級までの6名の留学生へのインタビュー調査に基づいて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京外国語大学 国際日本学研究	6. 最初と最後の頁 186-196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計10件(うち招待講演 2件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 鈴木智美
2. 発表標題 日本語学習者はどのような学習ツールを使っているのか 留学生を対象にしたアンケート調査の結果から見えるもの
3. 学会等名 国際シンポジウム「コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて 学習者調査から新しい辞書の構想と開発へ」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木智美
2. 発表標題 ICT時代の日本語学習者における効果的な辞書ツールの使用を考える
3. 学会等名 東京外国語大学国際日本研究センター夏季セミナー&サマースクール2018(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木智美
2. 発表標題 学習者の学習ツール使用状況 大学における調査結果
3. 学会等名 ワークショップ「デジタル時代の教師の学習支援のあり方」平成30年度日本語学校教育研究大会分科会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渋谷博子・清水由貴子・鈴木智美
2. 発表標題 デジタル時代の教師の学習支援 ワークショップ事前アンケートの結果から
3. 学会等名 ワークショップ「デジタル時代の教師の学習支援のあり方」平成30年度日本語学校教育研究大会分科会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰
2. 発表標題 世界の日本語学習者は今どのような学習ツールを使っているか ICT時代の日本語教育の鍵をツール使用状況から考える
3. 学会等名 第12回国際日本語教育・日本研究シンポジウム 「多言語世界における日本語教育の変遷」(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木智美・清水由貴子
2. 発表標題 今、日本語学習者はどんな学習ツールを使っているのか 教師の教育支援リテラシーの向上と学習支援について考える
3. 学会等名 東京学芸大学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木智美
2. 発表標題 「学習者はどんな学習ツールを使っているか：アンケート調査結果から見えるもの」
3. 学会等名 東京外国語大学 平成29年度 日本語教育・教材開発・実践教育研修共同利用拠点事業 第7回ワークショップ「ICT時代の日本語学習者はどのような学習ツールを使っているか」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渋谷博子・中村彰
2. 発表標題 「現役大学・大学院生の留学生にツール使用について聞こう」
3. 学会等名 東京外国語大学 平成29年度 日本語教育・教材開発・実践教育研修共同利用拠点事業 第7回ワークショップ「ICT時代の日本語学習者はどのような学習ツールを使っているか」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木智美
2. 発表標題 「辞書サイト管理者の声：辞書サイトを運営する元留学生からのメッセージ」
3. 学会等名 東京外国語大学 平成29年度 日本語教育・教材開発・実践教育研修共同利用拠点事業 第7回ワークショップ「ICT時代の日本語学習者はどのような学習ツールを使っているか」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清水由貴子・鈴木智美
2. 発表標題 「教師のツール使用：教育をもう一度見つめよう」
3. 学会等名 東京外国語大学 平成29年度 日本語教育・教材開発・実践教育研修共同利用拠点事業 第7回ワークショップ「ICT時代の日本語学習者はどのような学習ツールを使っているか」
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

平成29年度 日本語教育・教材開発・実践教育研修共同利用拠点事業 第7回ワークショップ開催
http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/kyoten/news/detail_20180326.html

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中村 彰 (NAKAMURA Akira) (10272618)	東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・准教授 (12603)	
研究分担者	清水 由貴子 (SHIMIZU Yukiko) (60735851)	聖心女子大学・文学部・講師 (32631)	
研究分担者	渋谷 博子 (SHIBUYA Hiroko) (30772173)	東京外国語大学・世界言語社会教育センター・助教 (12603)	2018年度まで
研究分担者	藤村 知子 (FUJIMURA Tomoko) (20229040)	東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授 (12603)	